



甲虫ニュース COLEOPTERISTS' NEWS

July 1989

No. 85

会 告

日本鞘翅目学会と甲虫談話会は、1989年から合体することになりました。新会名は日本鞘翅目学会とし、英文では旧日本鞘翅目学会のものを受け継いで、Japanese Society of Coleopterology と呼ぶこととなります。

日本鞘翅目学会の会誌は *Elytra* を引継ぎ、5月と11月の2回刊行します。予算上の総ページ数は100ページが限度ですが、寄付金や超過ページ代を活用して、できるだけ充実した紙面にしよう心掛けたいと思います。また、短報や書評も取りあげて、空白のページをできるだけなくしたいと考えています。

一方、「甲虫ニュース」と「さやばね」は統合して、年4回やや不定期に「甲虫ニュース」をお届けします。内容は、原則的に従来のを踏襲しますが、会務報告や大会、例会などの記事も盛りこんでいく予定です。また、財政的な余裕があれば、「日本産甲虫目録」も随時、刊行するつもりです。

新しい日本鞘翅目学会の順調な発展は、専門の研究者とアマチュア同好者との協調を促進し、全体として日本の甲虫学を進歩させるためにぜひとも必要です。会員の皆さまに、今後なお一層のご協力をお願いいたします。

上野 俊一

日本鞘翅目学会会則

第1章 総則

- 第1条 本会は日本鞘翅目学会 (The Japanese Society of Coleopterology) という。
- 第2条 本会は甲虫研究の進展をはかり、あわせて甲虫愛好者相互の親睦をふかめることを目的とする。
- 第3条 本会は第2条の目的を達成するため次の事業を行う。
1. 会誌、図書などの出版。
 2. 大会、総会、例会、木曜談話会、採集会の開催。
 3. その他。
- 第4条 本会は事務局を国立科学博物館分館内に置くものとする。
- 第5条 本会は地方の要請に応じ、常任幹事会の議を経て支部を設けることができる。

第2章 会員

- 第6条 本会は次にあげる会員で組織される。
1. 一般会員 甲虫に関心を持ち会費を納入した者。
 2. 賛助会員 本会の目的に賛同し、賛助会費を納入した個人または団体。
 3. 名誉会員 甲虫学にとくに顕著な功績が認められ、または甲虫学の進歩・普及に

とくに貢献した人で、幹事会の推薦により総会で承認された人。

- 第7条 本会に入会または退会する場合は所定の手続きをとり、常任幹事会の議を経ることとする。
- 第8条 会費を滞納した者は常任幹事会の議を経て会員としての権利の一部を停止され、2年におよぶ者は除名される。
- 第9条 会員は下記の権利を持つものとする。
1. 会誌等の配布を受ける。
 2. 本会の催す大会、総会、例会、木曜談話会、採集会などに参加できる。
 3. 会誌等に寄稿し、また大会および例会で講演することができる。
 4. 一般会員および個人の賛助会員は幹事の選挙権および被選挙権を持つ。

第3章 役員

- 第10条 本会は次の役員を置く。
- 会長1名、副会長1名、幹事20名以内、常任幹事10名以内、会計監査2名。
- 第11条 会長は本会を代表し会務を総括する。
- 第12条 会長は幹事の投票によって定める。任期は2年とし、3選することはできない。
- 第13条 副会長は会長を補佐し、会長の長期国外出

- 張あるいは事故あるときはその職務を代行する。
- 第14条 副会長は会長が幹事の中から指名委嘱する。任期は2年とする。
- 第15条 幹事は幹事会を構成し、本会の活動要項について評議する。任期は2年とする。
- 第16条 幹事は総会で選出される。
- 第17条 常任幹事は常任幹事会を構成し、本会の会務を運営する。
- 第18条 常任幹事は幹事の互選により選出する。
- 第19条 会計監査は年1回監査を行ない、その結果を総会に報告する。任期は2年とし、重任できない。
- 第20条 会計監査は常任幹事会の推薦に基づき会長が任命する。
- 第21条 編集委員長および編集委員は編集委員会を構成する。編集委員会の規定は別に定める。

第4章 運営機関

- 第22条 本会は次の機関で運営される。

1. 総会

- イ. 一般会員および個人の賛助会員で組織され、本会運営の最高議決機関である。
- ロ. 年1回開催される。
- ハ. 一般会員の4分の1以上の要望があるときは、会長は臨時に総会を開催しなければならない。
- ニ. 総会における議決は出席者の過半数をもって行なう。可否同数のときは議長がこれを決定する。

2. 幹事会

- イ. 第2条に定めた目的に則り本会の活動要項を評議する。
- ロ. 会長の召集により年1回以上開催する。
- ハ. 幹事会は幹事の2分の1(委任状を含む)以上の出席によって成立し、議決

は出席者の過半数によるものとする。可否同数の場合には会長がこれを決定する。

- ニ. 幹事会で決定した事項は総会で報告し、承認を求めるものとする。

3. 常任幹事会

- イ. 本会の会務一般について検討する。
- ロ. 会長の召集により年4回以上開催する。
- ハ. 本会の成立・議決等の条件は幹事会に準ずる。
- ニ. 常任幹事会で決定した事項は幹事会に報告し、承認を求めるものとする。

第5章 委員会

- 第23条 本会に編集委員会をおく。その他必要な委員会は幹事会の承認を得て設けることができる。

- 第24条 編集委員会は別に定める規定に従い、会誌、その他の本会出版物の編集を行なう。

第6章 会計

- 第25条 本会の会計は次のとおりとする。

1. 会員は次にあげる会費を納入しなければならない。ただし、名誉会員からは会費の徴収は行なわない。
- イ. 一般会費 年額5,000円 ただし、新入の場合は入会金1,000円、国外居住者は年額3,000円を加算する。
- ロ. 賛助会員 年額10,000円以上
2. 本会の経費は会費その他でまかなうものとする。
3. 本会の会計年度は1月1日より12月31日までとする。

第7章 付則

- 第26条 本会会則の変更は総会の議決による。

- 第27条 この会則は1989年3月26日より施行する。

◇報告◇

かねてお知らせのとおり、日本鞘翅学会設立大会を、さる3月26日、東京都港区虎の門 国立教育会館会議室で開催いたしました。

第1部の総会は、午後1時より、設立委員会委員長(上野俊一氏)の挨拶で始まり、議長を選出、会則(上掲)と役員承認に続き、担当各幹事による予算案、会誌発行、予定行事の説明と承認があり、とどこおりに終りました。第2部は2時から、馬場金太郎、黒沢良彦、森本 桂、佐々治寛之、佐藤正孝各氏による祝辞と新学会への要望、講話をいただき、設立大会にふさわしい有意義な一刻をすごすことができました。休憩をはさんで4時から同定会をかねた懇親の場とし、5時、和やかな雰囲気のうち無事閉会いたしました。参会者64名、なお、当日配布された記念発行の日本鞘翅学会会員仮名簿(1989年3月現在)によると、国内会

員401名、国外会員2名となっています。(大木)

◇お知らせ◇

日本鞘翅学会の事務局は、1989年3月26日より下記のとおりとなり、会費納入等の郵便振替番号が変更されましたのでご通知おきます。

事務局: ☎169 東京都新宿区百人町3-23-1 国立科学博物館分館 動物研究部昆虫第1研究室内
Tel. 03(364)2311 (内621)

郵便振替: 東京8-401793

「甲虫ニュース」への原稿送付とお問い合わせは下記へお願いします。

☎156 東京都世田谷区桜丘1-1-1 東京農業大学農学部昆虫学研究室 岡島秀治 Tel. 03(420)2131 (内350)

☎143 東京都大田区南馬込1-38-6 阿部光典
Tel. 03(771)1065 (事務局)

ヒメキノコムシと変形菌

林 長 閑

ヒメキノコムシ科 Sphindidae はニュージーランドを除く全世界に分布し、これまでに 6 属、36 種が知られている。周知のようにこの科は変形菌（粘菌）以外の菌類からは見出されていない。朽木に着生した変形菌に子実体（胞子嚢）が形成されると成虫が現われて産卵、幼虫は胞子を食べて育つ。しかし、その生態については詳しく調べられていないようである。

そこで筆者は近年、東京・神奈川を中心に変形菌の子実体を調べてみた。その結果、日本産の 3 種（ツヤヒメキノコムシ *Sphindus brevis* REITTER, クリイロヒメキノコムシ *S. castaneipennis* REITTER, マルヒメキノコムシ *Aspidiphorus japonicus* REITTER）の子実体から見出したが、マルヒメキノコムシの寄生率が最も高いことがわかった。

本稿ではマルヒメキノコムシを中心としたヒメキノコムシ科の生態を紹介するとともに、甲虫一般と変形菌の関係についても若干ふれることにした。この調査にあたって変形菌を同定して下さった国立科学博物館実験植物園の萩原博光先生に心から感謝したい。

甲虫と変形菌

甲虫が集まる変形菌はいずれも変形菌綱（真正粘菌）Myxomycetes に属するものである。甲虫と変形菌子実体との関係をまとめたものとしてまず LAWRENCE, J. F. & A. F. NEWTON (1980) の研究があげられる。6 科について食物とする菌の種類、幼虫の口器構造などを深めたものとして注目される。また SEN GUPTA, T. & R. A. CROWSON (1977) によ

るヒメキノコムシ科の研究は成虫・幼虫の形態からヒラタムシ上科における科の系統的位置づけを深めたものとして注目される。一方、菌類と昆虫に関する文献の中では、生態・進化に基づくシンポジウムの論文集 *Fungus-Insect Relationships* (1984) がよく知られる。BLACKWELL, M. が変形菌と節足動物を、WHEELER, Q. が変形菌を食べるタマキノコムシ科の進化を論じている。とりわけタマキノコムシが丸まる方向への進化は興味をひく。本書ならびに *Insect-Fungus Symbiosis* (1978) は昆虫と菌類の関係を考える上では見落せない文献といえよう。

さて、変形菌に集まる節足動物としては昆虫とダニがよく知られる。昆虫では甲虫目、双翅目、トビムシ目があげられるが種数では甲虫が最も多い。筆者がこれまでに採集したものと、これまでに記録されたものを科のレベルで記すと次のようになる。

ガムシ科 Hydrophilidae, エンマムシ科 Histeridae, タマキノコムシ科 Leiodidae, デオキノコムシ科 Scaphidiidae, ハネカクシ科 Staphylinidae, タマキノコムシモドキ科 Clambidae, マルハナノミダマシ科 Eucinetidae, コクヌスト科 Trogossitidae, ヒメキノコムシ科 Sphindidae, テントウムシダマシ科 Endomychidae, ヒメマキムシ科 Lathridiidae, ツツキノコムシ科 Ciidae.

これらの中で粘菌食性を持つものとしてはハネカクシ上科 Staphylinoidea のタマキノコムシ科、デオキノコムシ科、マルハナノミ上科 Eucinetoidae のタマキノコムシモドキ科、マルハナノミダマシ科、そしてヒラタムシ上科 Cucujoidea のヒメキノコムシ科、テントウダマシ科、ヒメマキムシ科、ツ

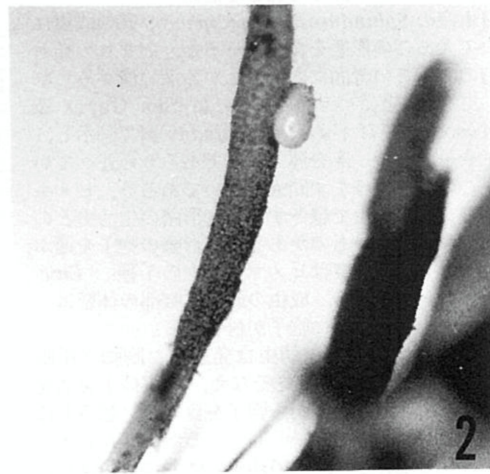
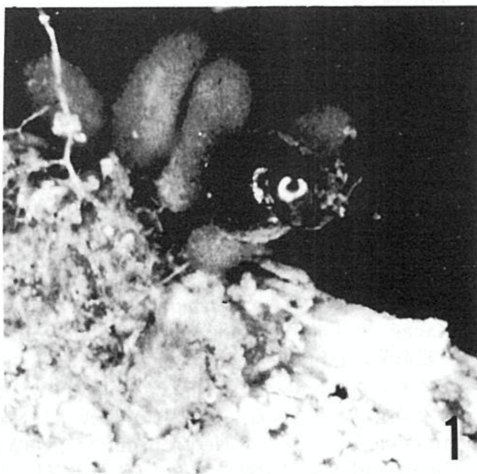


図 1 ムツボホコリカビに飛来したマルヒメキノコムシ、体長 1.5 mm (神奈川県神武寺, 8. viii. 1988)。

図 2 サビホコリカビに産みつけられたマルヒメキノコムシの卵、長さ 0.5 mm (神武寺, 8. viii. 1988)。

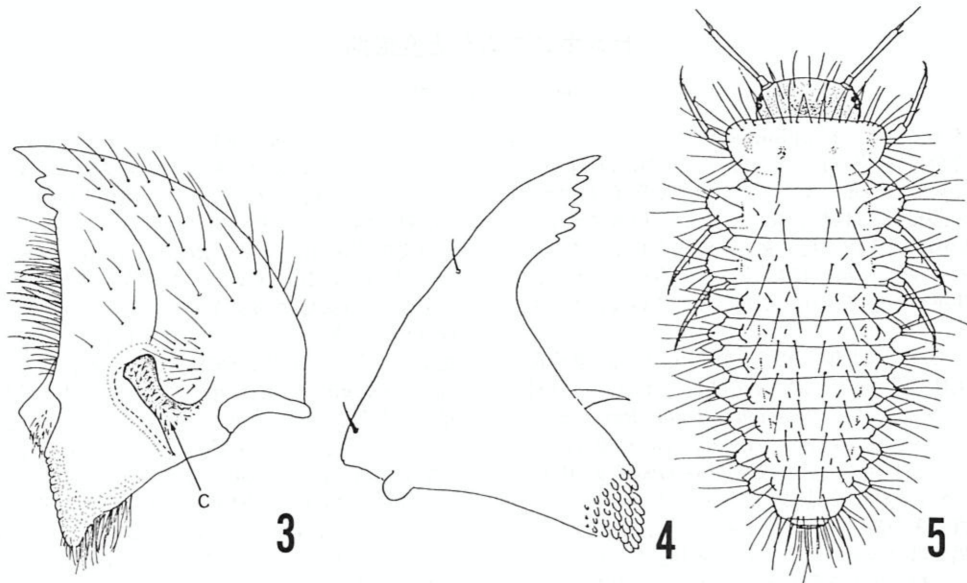


図 3-5 マルヒメキノコムシ, 3: 成虫の右大あご背面 (C: 溝を示す), 4: 幼虫の右大あご腹面, 5: 給齢幼虫の背面, 体長 2 mm.

ツキノコムシ科があげられる。とりわけヒメキノコムシ科は前述のように変形菌のみから見出されることで注目される。またツツキノコムシ科を除けば、いずれもヒラタムシ上科の Cerylonid グループに属し、この上科では起源の古いものと言えよう。タマキノコムシモドキ科、マルハナノミダマシ科もマルハナノミ上科では最も原始的とみなされるグループである。なおタマキノコムシ科の一部が原形体を食する他は、すべて子実体の胞子を食する。

ヒメキノコムシ類の形態と変形菌

日本産の *Sphindus* 属、*Aspidiphorus* 属の成虫について大あごの形態を調べてみると、いずれの類も左右の大あごの背面に内部で広がる深い溝がみられる。この形態についてはすでに SEN GUPTA & CROWSON (1977) が *Odontosphindus* 属で図示し、胞子や子実体の一部を運ぶ器官であろうと述べている。この考えにはまず間違いのないであろう。ヒメキノコムシ類は成虫で越冬する。変形菌の生活史との関連から興味深いものがある。変形菌の胞子を運ぶその他の甲虫としてはヒメマキムシの 1 種 *Enicmus* sp. が知られる。成虫の頭部・胸部の体壁はしわ状で、そのくぼみに胞子が付着する。

ヒメキノコムシ科の幼虫は発達した脚脚と単眼(頭部の各側面に 6 個)をそなえ、子実体上を活発に移動し、細毛体の中から胞子を食べる。触角も比較的発達(第 2 節が長い)しているが、マルヒメキノコムシでは著しい。この幼虫の体毛にはしばしば多くの胞子が付着している。

幼虫の大あごは先方(切嚙部)が鋸歯状、基部(臼

状部)の腹面にヤスリ状に細かい歯がある。切嚙部で細毛体を切り、口腔へとりこまれた胞子を臼状部の歯で固定し、下咽頭の硬皮板 hypopharyngeal sclerome にこすりつけて細胞壁を破るらしい。変形菌の胞子の多くは直径 6~10 ミクロンである。切嚙部と臼状部の間に膜状の内葉 prostheca があるが、内葉は胞子を臼状部へ移動させる機能があると考えられる。小あごにはブラシ状に毛をそなえ胞子を口腔へ掃きこむように取り入れる。以上のような形態は食菌性、特に胞子を食する甲虫の幼虫に多く見出される。

ヒメキノコムシ類の生態

マルヒメキノコムシは次の 7 種の変形菌から見出されたが今後の調査でさらに多くの変形菌から見出されるであろう。

マメホコリカビ *Lycogala epidendrum* (L.) FRIES, ウツボホコリカビ *Arcyria denudata* (L.) WETTST., キウツボホコリカビ *Arcyria nutans* (BULL.) GREV., ウツボホコリカビの 1 種 *Arcyria* sp., ホソエノケホコリカビ *Hemitrichia calyculata* (SPEGAZZINI) FARR, サビホコリカビ *Stemonitis axifera* (BULL.) MACBR., ヤリホコリカビ *Comatrichia longa* PECK.

変形菌の分類に対応させ、これまでに記録されたヒメキノコムシ類の食菌をそれぞれ属のレベルで示すと次のようになる。表の中の (NA) は North America から、(NT) は Neotropical から、(OW) は Old World からの記録である。また*印を付したものは、今回の調査で新しく加わったものである。

変形菌綱 (真正粘菌) Myxomycetes	ヒメキノコムシ科 Sphindidae
リケア目 LICEALES	
<i>Tubifera</i>	<i>Sphindus</i> (NA) <i>Eurysphindus</i> (NA)
<i>Reticularia</i>	<i>Sphindus</i> (OW) <i>Asphidiphorus</i> (OW)
<i>Lycogala</i>	<i>Sphindus</i> (OW) * <i>Asphidiphorus</i>
トリキア目 TRICHALES	
<i>Arcyria</i>	* <i>Asphidiphorus</i>
<i>Hemitrichia</i>	* <i>Asphidiphorus</i>
ムラサキホコリカビ目 STEMONITALES	
<i>Stemonitis</i>	<i>Sphindus</i> (NA) (NT) <i>Eurysphindus</i> (NA) <i>Sphindus</i> (NA) (NT) * <i>Asphidiphorus</i>
<i>Comatrichia</i>	
フィザレム目 PHYSARALES	
<i>Fuligo</i>	<i>Sphindus</i> (NA) (NT) <i>Odontosphindus</i> (NA) <i>Eurysphindus</i> (NA) <i>Asphidiphorus</i> (OW)

ヒメキノコムシ科の *Protosphindus* 属と *Sphindiphorus* 属については食する変形菌の属名が明らかでない。

ヒメキノコムシ類の成虫・幼虫は関東では6月下旬ごろから9月中旬ごろまで変形菌の子実体に見られる。マルヒメキノコムシの卵は8月にサビホコリカビ、ヤリホコリカビで観察された。卵は孢子囊や柄の部分に1粒ずつ生みつけられている。測定してみると長さが0.5 mm、幅が0.25 mmもある。

○徳之島におけるコカブトの採集例

コカブトの奄美亜種 *Eophileurus chinensis irregularis* PRELLI は、従来奄美大島特産とされており、最近発行された原色日本甲虫図鑑 (II) (1985) や日本産コガネムシ目録 (石田・藤岡, 1988) でも奄美大島のみが産地として掲げられている。

筆者の手許に徳之島で採集された本種の標本 (右写真) があるので、新産地として報告しておく。

1♀, 鹿児島県徳之島三京, 13. vii. 1985, 牧野信市採集。

コカブトムシの仲間を検討されている藤岡昌介氏によれば、この個体は上翅の点刻の特徴などから、奄美亜種の特徴を示しているとのことであった。

ご教示下さった藤岡昌介氏に感謝したい。
(東京都台東区, 藤田 宏)

○ *Agriotes* 属幼虫の限状凹陷の形態 (コメツキムシ科)

カバイロコメツキ属 (*Agriotes* 属) の幼虫は円筒形状をした針金虫型であるが、第9腹節背面の基部両側には1対の大形の限状凹陷 (図Aの↑印) が存

成虫の体長の1/3に達する大きさである。孵化も早い。生みつけられてから3日後には幼虫が這い出す。幼虫は約6日目に蛹化した。他種においても幼虫期間は同様に短い。

蛹化は孢子囊の柄の部分や朽木に体の末端をはりつけて行われる。したがって終齢幼虫の脱皮殻が蛹の腹部末端に残される。蛹は約4日後に羽化、成虫が出現する。

食菌性甲虫の幼虫には幼虫期間の短いものがみられるが、ヒメキノコムシ類の場合も子実体に孢子が存在する間に生育を終らせることが不可欠となる。蛹の期間まで短いのは、子実体の生ずる期間に世代をくりかえすためであろう。

引用文献

BLACKWELL, M., 1984. Myxomycetes and their arthropod associates. pp. 67-90. *Insect-Fungus Relationships*, Eds. by Q. WHEELER & M. BLACKWELL, Columbia Univ. Press, New York.

LAWRENCE, J. F. & A. F. NEWTON, 1980. Coleoptera associated with the fruiting bodies of slime molds (Myxomycetes). *Coleop. Bull.*, 34 (2): 129-143.

SEN GUPTA, T. & R. A. CROWSON, 1977. The coleopteran family Sphindidae. *Ent. mon. Mag.*, 113: 177-191.

WHEELER, Q., 1984. Evolution of slime mold feeding in leiodid beetles. pp. 446-477. *Insect-Fungus Relationships*, Eds. by Q. WHEELER & M. BLACKWELL, Columbia Univ. Press, New York.

(横浜市港北区)

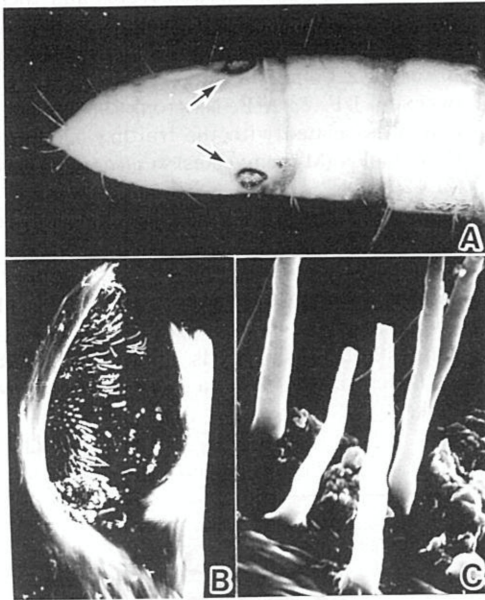


徳之島産コカブトムシ♀

在する。この形態は本属特有のものであるが、詳しい形態や機能については殆ど判明していないように思われる。

FORD (1917) は「a muscle attachment」とか「eye-shaped muscular impression」と表現しているが、これ以上の詳しい説明はなく、EIDT (1954) は「eye-like impression」という簡単な記載である。ただ、BINAGHI (1942) はやや詳しく「sezione sagittale dela fossetta sensoriale」と記述している。

筆者は本属の幼虫類を研究するについて、この特徴のある形態が単なる凹陷であるのか、他の生理機能も有する凹陷であるのかを解明したいと思っていたが、走査電顕によるやや詳しい形態を知ることができた。



A: 幼虫の第9腹節背面の眼状凹陷(↑印); B: 同上, 眼状凹陷の拡大(×300); C: 同上: 眼状凹陷内部の円筒形状の毛(×5,000).

調査した幼虫はオグラカバイロコメツキ *Agriotes ogurae* LEWIS (図) で、限状凹陷は楕円形状を呈し、長径は約0.3 mmである。縁は強く角質化され、内面は不規則なひだを生じ、太短い毛を多く生じている(図, B)。毛は円筒形状で、末端部は切断状をしており、体表面に生ずる毛とは著しく相違する(図, C)。眼状凹陷の主要な生理機能はこの毛にあり、おそらく体内の水分調節などを行っているのではないかと想像される。

最後に、幼虫を提供していただいた農林省東北農業試験場の河野勝行氏に心から御礼申し上げます。

引用文献

BINAGHI, G. (1942) Mem. Soc. Ent. Italiana, 21: 165-186.

EIDT, D. C. (1954) Cand. Ent., 86(11): 481-494.

FORD, G. H. (1917) Ann. Appl. Biol., 3: 97-115.

(岡崎国立共同研究機構, 大平仁夫)

○オオヒメゲンゴロウを岐阜県恵那市で採集

オオヒメゲンゴロウ *Rhantus erraticus* SHARP は北海道、本州に分布する比較的稀な種類で、筆者の知るかぎりでは長野県松本市が最も西端の記録である(高桑, 1987は「確実な記録は新潟県妙高高原が西限」としているが、KAMIYA, 1938には「Matsumoto」という記録がある)。また、南端の記録は秋山, 1989による茨城県筑波山である。

筆者はこれらよりさらに西南にあたる岐阜県恵那市において本種を採集しているので報告する。

1頭(写真), 岐阜県恵那市飯地町五明(標高約580 m), 3. vi. 1987, 長谷川道明採集。

本種は近縁のヒメゲンゴロウ、エゾヒメゲンゴロウと非常によく似ておりまぎらわしいが、1) 全体に赤味が強いこと、2) 前胸背中央の黒紋が横に細長いこと、3) 上翅は基部がより平行に近く、後方にむかうにつれて急に広がるなどの諸点で他種とは区別できる。

採集地は放置されてから数年はたっていると思われる休耕田で、同地にはハッチョウトンボが多数発生していた。なお、標本は岐阜県博物館に保管されている。



参考文献

- 1) 秋山黄洋, 1986. オオヒメゲンゴロウ茨城県で採集される。甲虫ニュース(74): 7.
- 2) KAMIYA, K., 1938. A Systematic Study of the Japanese Dytiscidae. J. Tokyo Nogyo Daigaku, 5: 1-66, pls. 1-7.
- 3) 佐藤正孝, 1985. ゲンゴロウ科. 原色日本甲虫図鑑, 2, pp. 183-201, pls. 33-36. 保育社.
- 4) 高桑正敏, 1987. 日本産ゲンゴロウ類分布資料(2). 甲虫ニュース(79/80): 9.

(岐阜県博物館, 長谷川道明)

○ケプトヒラタキクイムシについて気付いたこと

ケプトヒラタキクイムシ *Minthea rugicollis* (WALKER, 1858) は熱帯広布種で日本では昭和40年、インドから輸入された豆の木箱から発見されたのが最初で、その後、鹿児島、福岡、徳島、岡山、広島、神奈川県から発見されている。筆者も下記の通り神奈川県で採集している。

1頭、神奈川県藤野町, 13. vii. 1985.

ところで、HATCH (1961) の *The Beetles of the Pacific Northwest, part III* を見ていたところ、妙なことに気がついた。それは490頁の plate LXVI に出ている Fig. 3 の図 (図はコピーしたもの) である。

筆者の採集したものは写真の通りである。

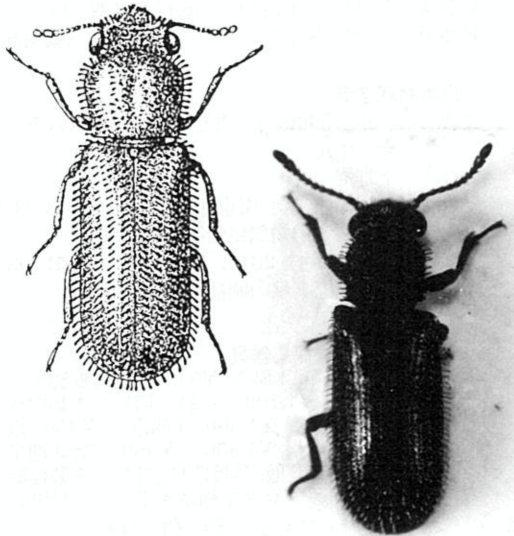
一見して相違することは、①触角の長さ②前胸背の形状である。すなわち触角は明らかに写真の方が長い。前胸背板は図は横長であり、写真は縦長である。

その他、図は触角の末節が前節より短く描かれている。

338頁には検索表などの記述もあり、これにしたがうと写真のものは正しい様に思われるが、図は記述と一致しないように思われる。外国人の一部にはかなり好い加減な図を書く人がいるが、どうも変である。

雄、雌の違いではないと思う。万一、図の方が正しいとなると筆者の採集したものは別物である。なお、最近、出版された保育社の原色日本甲虫図鑑(III)の図版は筆者のものと一致していると思う。

筆者にはこれ以上調査することは不可能なので、気の付いたことを書いてみた。読者諸兄、諸先生にご教示いただければ幸である。



(神奈川県小田原市, 平野幸彦)

○与那国島2月のゴミムシダマシ

筆者は1989年2月に与那国島で若干のゴミムシダマシを採集しているので記録しておきたい。今回報告するゴミムシダマシは10種であるが「沖縄産昆虫目録」(1987)によれば同島未記録と思われる種も含まれており、また、この時期の採集例はほとんど見られないので報告する次第である。

なお、同日録で与那国島の記録が見られない種には*印を付けておいた。

1. マルヒラスナゴミムシダマシ *Diphyrrhynchus oharensis* NAKANE*

3頭, 比川, 25. ii. 1989 (以下同年)

2. コヒラスナゴミムシダマシ *Diphyrrhynchus shibatai* KASZAB

多数, 比川, 25. ii

上記2種共、比川海岸で採集したものだが、マルヒラスナは海岸上部の草地の砂の中から採集し、コヒラスナは波打際の高藻クズの下から採集した。

3. センカクスナゴミムシダマシ *Gonocephalum senkakuense* M. T. CHÛJÔ

9頭, 祖納, 24-25. ii; 2頭, 比川, 25. ii

いずれも海岸のかなり上部、および人家の周囲の石の下で採集した。

4. ヤマトスナゴミムシダマシ *Gonocephalum coenosum* KASZAB*

1頭, 祖納, 25. ii

祖納集落の石垣の下で採集した。

5. コマルチビゴミムシダマシ *Nesocaedius minimus* (M. T. CHÛJÔ)*

2頭, 祖納, 25. ii

6. ヒメホソハマベゴミムシダマシ *Micropedinus pallidipennis* LEWIS*

3頭, 24. ii; 2頭, 比川, 25. ii

両海岸共、打ち上げられた海藻をふるって見出した。採集頭数は上記の通りだが個体数は多く、冬でも活動中のようである。

7. アオツヤキノコゴミムシダマシ *Platydema marseuli* LEWIS

多数, 久部良岳, 25. ii

8. ベニモンキノコゴミムシダマシ *Platydema subfascia* (WALKER)

7頭, 久部良岳, 25. ii

9. ナガニジゴミムシダマシ *Ceropria induta* (WIEDEMANN)*

1頭, 久部良岳, 25. ii

10. オオクロエグリゴミムシダマシ *Uloma polita* (WIEDEMANN)

1頭, 久部良岳, 25. ii

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

◇お願い◇

短報をお寄せ下さい。生息環境、生態なども付け加えて頂ければ申しぶんありません。

(編集部)

○佐渡のゲンゴロウモドキ

左手に水生甲虫用の網、右手に鎌を持ってキイチゴやノイバラの繁るヤブを切り開きながらの沼さがし。悪戦苦闘すること3日間、ついに佐渡のシャープゲンゴロウモドキ *Dytiscus sharpi* WEHNCKE を採集することができたので報告する。

3♂♂, 4♀♀, 新潟県佐渡郡相川町大浦, 27-28. v. 1989, 阿部光典採集。

翅端の雲状紋は個体により少し現れる。♀の上翅条溝は中央よりもやや後方までのびている。千葉県産の♀では上翅条溝をもつ型は少ないが、佐渡では条溝をもつ型のみが採集された。後基節突起と♂交尾器の形態は基亜種に近い。全体的にみて、関西亜種 *D. s. validus* RÉGIMBART に移行する型とも思える。

佐渡で昔採れたシャープの標本が佐藤正孝教授の所に1頭ある。馬場金太郎博士の採集品である。これが動機となって私の佐渡遠征となった次第。調査地点は上野俊一博士のご助言によって相川町に決めた。相川には池が多い。しかし、すくってみるとクロズマメばかり。農家の人にたづねたら「大きいゲンゴロウ? いるよ、でも大きな池にはいないな」というわけで案内してくれることになった。山合にある小さな水田の畦を登ってゆく。水田がなくなってヤブになる。鎌で草を刈り払ってくれるおじさんの後についてさらに登る。森の奥100mくらいの所に直径5mほどの沼があった。周囲は薄暗く、水は濁ってきた。落葉や枯枝が堆積していてズブズブとひざまでもぐる。「こんな沼か! 駄目だな」と私は思った。しかし表情には感謝の気持ちを溢れさせねばならぬ。おじさんは「もっと奥にもあるし、ほら、向うの尾根に松の木が見えるだろう。あの下にも2つあるし、でも、いるかどうか分ねえけんどな」といって山を下って行った。私も山を下りたい気持だ。しかし親切なおじさんに対する礼儀として網をぬらす必要がある。1回目は落葉ばかり。2回目も落葉。3回目の時である。何か動くものが見えた。「シャープだ!」かくて必死の作業が始まった。3頭採ってひと休み。「別の沼も……でもヤブが……」というわけで車まで鎌を取りに戻る。かくて私は連日ヤブをこぎ、沼をさがし歩いた。

初めての佐渡調査は大成功であった。ただ馬場先生に無断で「越後領内」へ入ったので叱られそうである。(東京都大田区, 阿部光典)

○ウエノヒョウタンクチカクシゾウムシを横浜市で採集

ウエノヒョウタンクチカクシゾウムシ *Hytanzen uenoi* MORIMOTO はオモトの害虫として知られているが筆者の知るかぎりではその採集報告はほとんど無い様である。筆者は昨年(1988)の4月に下記の場所をおとずれた時、柿の林に植えられたオモトの群落を発見し根元を探したところ幸いにも2頭の本種を採集することが出来た。次いで11月に再度採集を試みたところ死がい(死がいの)を2頭発見した。この事により確実に発生していると確信し、本年5月に再び下記の2名と共に当地をおとずれ、合計10頭の本種を採集することが出来たので報告する。最後に、発表を許された中山不羈、大木 裕の両氏にお礼申し上げる。また、同定その他、貴重なご助言を頂いた江本健一氏と宮川澄昭氏にも深謝したい。

2頭, 神奈川県横浜市鉄町, 14. iv. 1988. 和泉敦夫採集; 2頭(死がい), 同地, 3. xi. 1988. 和泉敦夫採集; 6頭(内死がい1頭), 同地, 4. v. 1989. 和泉敦夫採集; 3頭, 同地, 4. v. 1989. 中山不羈採集; 1頭, 同地, 4. v. 1989. 大木 裕採集。

参考文献

森本 桂, 1984. ゾウムシ科. 原色日本甲虫図鑑 (IV), pp. 269-344. 保育社。

(東京都大田区, 和泉敦夫)

◇訂正◇

第83/84号: 表紙

December 1989 → December 1988

総目次: 表紙

No. 41-Nos. 82, 83 → No. 41-Nos. 83, 84

総目次: 13頁右, 15頁右, 16頁右, 29頁右

伊藤善之 → 伊東善之

(編集部)

日本鞘翅学会

会費(一ケ年)5000円, 次号は1989年8月下旬

発行予定

発行人 上野俊一

発行所 日本鞘翅学会 東京都新宿区百人町 3-23-1

国立科学博物館昆虫第1研究室

電話(364)2311, 振替 東京 8-401793

印刷所 (株)国際文献印刷社

昆虫学研究器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめて出来たステンレス製有頭昆虫針00, 0, 1, 2, 3, 4, 5, 6号, 有頭W針も出来ました。その他, 採集, 製作器具一切豊富に取り揃えております。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

振替 東京(3)21129

電話 (03)409-6401(ムシは一番)

F A X (03)409-6160

(カタログ贈呈) (株)志賀昆虫普及社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,700, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下 ¥1,300, 4個以上 ¥850(以下同様), 第2地帯 ¥1,500, ¥950, 第3地帯 ¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製作販売しております。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-21-25

電話(03)811-4547, 振替 6-113479